
女を造るということ

星新一「ボッコちゃん」における
女性像と社会的ジェンダー構築

Sera PALMER

パルマー・セーラ

0. はじめに

第三波フェミニズムやセクシュアリティ・スタディーズが1990年代に構築したクィア理論の影響により、特にアカデミアにおいて、ジェンダーとセクシュアリティに関するわれわれの認識や思想に大きな変化が生じた。ジュディス・バトラーに代表されるジェンダーの社会構築論やジェンダー・パフォーマティビティ論は、ジェンダーが実際に存在するかいなかという課題について、多くの研究者の思考を触発した。しかし、バトラーがこのような理論を構築し、社会的運動を促したとはいえ、彼女がジェンダーの社会的構築性を初めて指摘したというわけではない。バトラーがその著作で多く引用している『第二の性』において、シモーヌ・ド・ボーヴォワールが「人は女に生まれるのではない、女になるのだ」⁽¹⁾と述べたことは、ジェンダーの構築性を既に予示していたものに他ならない。つまり、いかに優れた研究でも、それは必ず誰かの肩の上に立って作り上げられたものなのである。ドナ・ハラウェイが1984年に人間と機械、動物の境界を問い直した際にも、テクノロジーの発達が人間やジェンダー役割にもたらした影響や変化に初めて言及したわけではなかった。その上、ジェンダーに関する規範を問い直す革新的な思想を練り上げた者は、欧米の研究者に限定されない。ジェンダーやテクノロジーのあり方を検討している批評家や作家は世界中に存在する。本論は、ジェンダー論やクィア理論と異なる日本の科学小説（Science Fiction）という文学の領域において、ジェンダーとセクシュアリティがいかに描写されているかを検討する。従来、日本の科学小説が、特にそれが執筆された日本において、ジェンダーとの関係に注目して考察された例は極めて少ない。しかし、SFには人間と社会の未来を想像する要素があると仮定すれば、その未来にはジェンダー構造がいかに変化しているのかという要素も必ず見出されるはずである。したがって、本論は日本SFの代表的作家の一人である星新一の主要作品の一つ「ポッコちゃん」を考察することで、その文学的想像力が捉えたジェンダーの未来について再考しようとするものである。

星新一の「ポッコちゃん」は、1958年に『宇宙塵』2号に発表されたショートショートである。このテキストは、バーを経営しているマスターが「女のロボット」であるポッコちゃんを製造し、バーで働かせ、客と会話させるという筋立てで、星の数多くの作品と同様に、SFに分類されている。日本のSFを讀みの俎上にあげようとするとき、ジェンダー論の観点から主に2つの高いハードルに直面することになると思われる。第一に、サイエンス・フィクションが文学と

(1) Simon de Beauvoir, *The Second Sex*, Vintage Books, 1973, p. 301.

して論じられるというよりもむしろ、エンターテインメントの枠組みに固定化される傾向にあるということである。例えば、稿者が訪れた古書店では作品が値引かれず棚に揃い、今なお続く星の人気を感じさせるのに対して、東京大学の図書館には彼の小説やフィクション作品が一つも所蔵されていない。このことは、星作品に与えられてきた蔑視的なエンタテインメントへの扱いを如実に物語る例である。しかし、カルチュラル・スタディーズが説得的且つ興味深いかたちで示してきたポピュラー文化研究の重要性に鑑み、いわゆる〈純文学〉のみならず、〈大衆文学〉に目を向ける必要がある。

第二のハードルは、サイエンス・フィクションが、男性の文学と位置付けられる傾向にあることである。稿者が、米国のある研究者に日本のSFについて研究する方針を報告した際、女性嫌悪や男性主義に陥らない作家やテキストが見つかるのかという懸念が表明された。しかし、日本のSFが男性の「聖域」として認識される原因が、どれほど作品に、また読者の思考に潜んでいるのかという点は問い直す余地があると思われる。したがって本論は、「日本SFの御三家」の一人と称される星新一の代表作である「ボッコちゃん」をジェンダーの視点から読もうとするものである⁽²⁾。実のところ、日本のSF研究が全体的に少ないながら、本作はその中で、特に海外の研究においてジェンダーを主題化した作品として注目されてきた。ロバート・マッシュューズはその著書『Japanese Science Fiction: A View of a Changing Society』の第8章で、日本のSFに見られる性の問題に着目している。その章においていち早く取り上げられるのが「ボッコちゃん」である⁽³⁾。マッシュューズがこの作品を第一に取り上げるのは、それが明らかに性とジェンダーというテーマを含む作品だとみなしたからであろう。なるほど本作は女のロボットを製造することから、青年の失恋が及ぼす皮肉に満ちた暗澹たる結末に至るまで、女とは何か、男とは何か、人間のジェンダーあるいは性とは何かという問いを読者に発し続ける作品であるといえよう。それにもかかわらず、この作品をジェンダーの視点から深く分析する研究は管見の限りではほとんど見当たらない。故に本論では、「ボッコちゃん」がなぜ読者に女性と男性のあり方やジェンダーについて疑問を抱かせる作品なのか、その理由と意味について検討したい。また、SF作品が一人の個人の登場人物よりも、社会構造や人類全体の未来を検討するものが多いため⁽⁴⁾、本論は歴史的・社会的な事例をあげながら分析を進める。第1節では、「ボッコちゃん」が執筆された当時のテクノロジーの開発を概観した後、テクノロジーをめぐる同時代状況と〈女性〉が社会的に期待されるコミュニケーション方法と

(2) 本文からの引用は全て、星新一「ボッコちゃん」(新潮文庫、2015年)に依拠した。

(3) Robert Matthew, *Japanese Science Fiction: A View of a Changing Society*, Routledge, 1990, p. 94.

(4) William Sims Bainbridge, *Dimensions of Science Fiction*, Harvard University Press, 1986.

の関係について考察する。第2節では、バーのマスターがボッコちゃんという「女のロボット」を造る意味を検討する。そして第3節では、作品の末尾が示唆している社会におけるジェンダー関係への批評性を明らかにする。

1.『ボッコちゃん』における知能とコミュニケーション

SF作家は、科学やテクノロジーを作品に盛り込んでいる以上、それぞれの時代の技術開発に通暁していると思われる傾向にあり、星新一の場合には、まさしくこの傾向に立つ作家であるといえる。1911年に父親が立ち上げた星製薬株式会社の後継者として生まれた星は、東京大学で農芸化学を学び、卒業論文でペニシリンについて、修士学位論文でアスペルギルス属のカビについて執筆した経歴をもつ⁽⁵⁾。つまり、星は同時代のSF作家の中でも科学分野に精通しており当時の技術開発についての認識が作家を目指す以前から深かったと言ってよいだろう。また、父親の急逝のために大学院を中途退学した後にSFを読み始め、円盤研究会や科学小説を検討するサークルで同名の同人誌を発行していた「宇宙塵」など、科学的空想⁽⁶⁾について考える集会に参加し始めたということから、科学業界で話題になっていた諸問題を把握していたとも仮定できよう。

長期にわたって科学技術の進展に興味を抱いてきた星が、1958年に「ボッコちゃん」を執筆したことは、偶然ではないだろう。日本SFの中でロボットに取材した作品は数多くあるが、とりわけ星の「ボッコちゃん」はその最前線に屹立している。その一方、「ボッコちゃん」と並ぶ星の代表作の一つ「おーい、でてこーい」(1958年)が、直接的に技術開発に触れていない、いわゆる「ソフトSF」⁽⁷⁾であるからこそ、星は当時、多様性に富むかたちで自身の執筆活動を展開していったことが窺えよう。すなわち、星が当時「ボッコちゃん」を執筆した背景には、数多くの可能性の中から、ロボットにまつわる話題を戦略的に選択したということが想定されるのである。

(5) 奥野健男『奥野健男作家論集:第5巻』1978年。

(6) 父の会社を辞し本格的にSF作家を目指す前から、SFに興味を示した星は日本空飛ぶ円盤研究会に参加する。そこで柴野拓美に出会い、一緒にSF同人誌『宇宙塵』を設立することになった。その後、星はSF作品を発表しながらも、円盤研究会や『宇宙塵』の中心メンバーが行っていたSF研究会に頻繁に参加していたという。最相葉月『星新一:一〇〇話をつくった人』新潮社、2007年、192-197頁。

(7) SFはハードSFとソフトSFという二カテゴリーに分離されている。ハードSFは科学性が極めて強

いものであり、ソフトSFはそうでないものである。研究者や批評家によって、どの作品がハード、どの作品がソフトという分類方法は異なるが、「ボッコちゃん」は「ロボット」をテーマにし、執筆当時の機械知能学の影響を受けているため、ハードSFと考えても良いと思われる。これに対して「おーい、でてこーい」(1958年)は、神話的な構造で、特定の科学技術に直接的に触れていないため、ソフトSFとして考えられる。

ここで「ボッコちゃん」のテキスト分析に入る前に、その生成に深く関与したと思われる同時代の科学技術の動向を概観しておきたい。〈人間〉ではないものが〈考える〉ということを中心とした作品はメアリー・シェリーの『フランケンシュタイン』(1818)などに見られるが、ロボットが初めて登場したのは、チェコの作家カレル・チャペックの戯曲「R.U.R. ロボット」(1920)である⁽⁸⁾。この戯曲によって「ロボット」という言葉が世界的に普及したと指摘されている⁽⁹⁾。そして、文学的想像力の後を追うかたちで、ロボットあるいは機械の〈知能〉が研究対象として捕らえられ始めたのは、星が未だ幼かった1930年代から大学院を中退した直後の1950年であるとされている⁽¹⁰⁾。

1930年代から50年代にかけて科学技術研究に大きな揺らぎをもたらした、現在では人工知能の始祖とも呼ばれているのは、イギリスの数学者、アラン・チューリングである。チューリングは、1936年に発表した論文⁽¹¹⁾で初めて、コンピュータの動作をシミュレートする仮想機械の可能性に触れ、第二次世界大戦中に、ナチスドイツの軍隊が実際に使用していた暗号文を解読できる計算機を製造し、連合国の戦勝に大きく貢献した。戦後においてもチューリングは工学の研究を継続し、1950年には計算可能な機械の知能についての論文⁽¹²⁾を発表した。この論文は、機械が人間のように思考可能であるかという問題はとりあえず置き、人間と同様のコミュニケーションが可能かという問題に焦点化することで、機械のコミュニケーションを評価するチューリングテストを提案した。チューリングテストとは、人間の被験者が、話している相手の見えない状態におかれ、その相手が人間か機械かを会話から区別ができるかどうかを判断するテストである。被験者が区別できない場合には、その機械はチューリングテストに合格したと見なされる。ここでチューリングの研究実績とその内容について概観した理由は、星がSFの研究会などに参加することによって、仲間とともに当時の科学技術の進展について知識を深め、また、頻繁に作品の構想をメモしそのモチーフを渉猟する過程で、チューリングの研究が星の想像力とテキストの生成に深く関与していたことが想定されるからで

(8) 長山靖生『日本SF精神史』河出書房新社、2018年、14頁。

(9) カレル・チャペックの戯曲「R.U.R. ロボット」において「ロボット」という言葉が初めて使われたが、チャペックは1933年のインタビューにおいて、言葉を考えたのは自身の兄ジョセフ・チャペックであると出張している。Lidove noviny, 1933年12月24日。

(10) クルト・ゲーデル(1906-1978)が1931年に「不完全性定理」という論文を発表したことがコンピューターサイエンスの始まりとされている。Paul E. Ceruzzi, *A History of Modern Computing*,

MIT Press, 2003.

(11) A.M. Turing, "On Computable Numbers, With an Application to the Entscheidungs Problem," *Proceedings of the London Mathematical Society*, November 23, 1936.

(12) Alan Turing, "On Computing Machines and Intelligence," *Mind* 49, 1950, pp. 433-460.

ある。星についての著作があるジャーナリスト最相葉月も、チューリングの論と「ポッコちゃん」の関係について次のように論じている。「新一は、そのころ誕生したばかりのコンピュータの抱える最大の課題が『コンピュータは知能を持つことができるのか』であることを承知していたのは間違いないだろう」⁽¹³⁾。すなわち機械が徐々に改良され人々の生活の一部となった時代、そして人間のように計算可能なコンピュータが発明された時代に星は人間と機械のそれぞれのあり方について思索を巡らせていたのである。その思索をテキストに残したのは、当時の社会状況をテキストに反映させるという彼の戦略でもあったと考えられる。

実際に、ポッコちゃんがバーの客と交わす会話は、チューリングの理論のもとにその後展開を見せた人工知能の研究と類似している点で極めて興味深い。1964年に、マサチューセッツ工科大学のコンピュータ科学・人口知能研究所が、初めてチューリングテストに合格したと言われているELIZAというコンピュータを発明した。ELIZAが実際に若い女性と対話しているセリフは以下のように記録されている。

女性:私の恋人が私をここに呼んだのです。

ELIZA:あなたの恋人があなたをここに呼んだのですね。

女性:彼は、私がいつも落ち込んでいると言うんです。

ELIZA:あなたが落ち込んでいることを私は残念に思います。

女性:本当ですね。私は不幸です。

ELIZA:ここに来ることで、あなたは不幸じゃなくなると思いますか? [...] ⁽¹⁴⁾

では、女性とELIZAの間で交わされた以上の会話と、ポッコちゃんがバーの客と交わす会話とを比較しよう。以下に引用するのは「ポッコちゃん」の冒頭部分であり、ポッコちゃんが客に服を褒められた場面である。

「きれいな服だね」

(13)最相葉月『星新一：一〇〇一話をつくった人』新潮社、2007年、236-237頁。

(14)Joseph Weizenbaum, “ELIZA—a computer program from the study of natural language communication between man and machine,” *Communications of the ACM*, Volume 9 Issue 1, 1966., Volume 9 Issue 1, 1966. 邦訳は筆者による。ELIZA発明者のジョセフ・ワイゼンバウムによる論文の原文は、“my boyfriend made me

come here / YOUR BOYFRIEND MADE YOU COME HERE / He says I am depressed much of the time. / I AM SORRY TO HEAR YOU ARE DEPRESSED / It's true. I am unhappy. / DO YOU THINK THAT COMING HERE WILL HELP YOU NOT TO BE UNHAPPY”となっている。

「きれいな服でしょ」

「なにが好きなんだい」

「なにが好きかしら」

「ジンフィーズ飲むかい」

「ジンフィーズ飲むわ」(16頁)

このように、ELIZA とポッコちゃんはいずれも、相手のセリフの中心的な言葉を繰り返す形で返事をする。特に上に引用した女性と ELIZA の対話における最初のやりとり「私の恋人が私をここに呼んだのです」、「あなたの恋人があなたをここに呼んだのですね」という部分は、星がこれを参考にして「ポッコちゃん」を執筆したのではないかと思わせるほど、ポッコちゃんと客との会話に類似している。

本論はコンピュータの ELIZA と「ロボット」のポッコちゃんの会話を比較しているが、それぞれの言葉を定義をしなくてはならない。「コンピュータ」という言葉はもともと計算するものという英語からの外来語であり、まさにその計算力を強調している。これに対して、ロボットという言葉はよりシンプルな動きをする自動機械を連想させる。しかし、ポッコちゃんの上の客との会話は、ポッコちゃんにある程度のコンピュータ的な計算力がなければ不可能であろう。したがって、「ロボット」と言いながらも、ポッコちゃんにはコンピュータ的な要素があったことを想定できよう。

では、ポッコちゃんの会話がジェンダーといかに関わっているかという論点に考察を進めたい。上に引用した ELIZA とポッコちゃんのそれぞれの会話について、おそらく多くの読者が、それがコンピュータとの会話であることに気がつくか、少なくとも違和感を抱くことだろう。しかし、ELIZA を発明したジョセフ・ワイゼンバウムが驚きをこめて語ったところによれば、ELIZA の実験において被験者は彼らが話している相手、すなわち ELIZA に対して違和感を抱かなかったという⁽¹⁵⁾。同様に、バーの客はポッコちゃんが人間の女性ではないということに気づかないままである。その理由は ELIZA とポッコちゃんそれぞれの会話の構造あるいは設定にあると考えられる。ELIZA に関しては、それが発明された当時に頻用されていた新し

(15)“ELIZA—a computer program from the study of natural language communication between man and machine,” *Communications of the ACM*, Volume 9 Issue 1, 1966., Volume 9 Issue 1, 1966.

い心理療法である来談者中心療法⁽¹⁶⁾のセラピストになぞらえられる。当時、この療法を利用したセラピストは、直接的に患者に診断を下さず、患者がその苦悩の原因に自らたどりつくように、質問を繰り返すことで治療を進める。このようにセラピストの応答を反復するというコミュニケーション方法をとるが故に、ELIZAは対話相手の発言の内容に深い反応を示すかわりに、さらに詳しい説明を求めることで、コンピュータであることに気がつかれないのである。そして、ポッコちゃんが機械であることを悟られずに済むよう施された対策、それはすなわち「彼女」が〈女〉である、ということである。

星新一は、ゆくゆくは作品に結実しうるモチーフをあらゆるところに書き留めていた。例えば、1957年12月の銀行手帳には「オセジワイワナイ ポッコちゃん」と書いている⁽¹⁷⁾。このメモは星が初めて「ポッコちゃん」に結びつくことになる作品の素材を思いついた時のものである。そして、1961年7月号の『宝石』に掲載されているインタビューによれば、「ポッコ」という名は「ロボット」の愛称であるという。「ポッコ」に女性を示す記号である「ちゃん」をつければ、〈女〉のロボットができあがる。また、別のインタビューにおいて星は、「ポッコちゃん」という言葉がそれだけで「女のロボット」を意味するとも述べている⁽¹⁸⁾。「ポッコ」という名は、「ぼっ子」と記せるように、伝統的に女性に付けられてきた名前を連想させると同時に、「ポッコ」というカタカナと擬態語に近似した響きが硬質で重々しく、その名はロボットにふさわしい。このように、ロボットと人間が会話するショートショートが構想された最初の当初から、そのロボットが「女のロボットであった」⁽¹⁴⁾ことに鑑みれば、この作品の中で「ロボット」と「女」という二つの要素は不可分の関係にあるのである。

また、もう一つ「オセジワイワナイ ポッコちゃん」というメモから窺えるのは、星は「ポッコちゃん」を書こうと思った当初から、女性のコミュニケーションのあり方に疑問を持っていたということである。星は特に女性が会話において使うお世辞が苦手だったと言われ、このメモをした12月の夜は、飲み会の帰りだったという⁽¹⁹⁾。その会で苦手なお世辞を言われて、お世辞を言わないロボットが存在したらどうなるだろうと考える星の姿が目に見え、しかし「ポッコちゃん」を書こうと思ったきっかけはさておき、このメモが明らかにするのは、本作はコミュニケーションのあり方を重要なテーマとして扱う作品だということである。

(16) 来談者中心療法(英: Client Centered Therapy
又はRogerian Psychotherapy)とは、1940年代に
臨床心理学者のカール・ロジャーズに創始され
た心理療法である。1980年代までに根強い人
気を見せ、現代の心理療法にも大きな影響を
与えたと言われている。Kyle Arnold, "Behind
the Mirror: Reflective Listening and its Tain
in the Work of Carl Rogers," *The Humanistic*

Psychologist, 42:4, pp. 354-369.

(17) 最相葉月『星新一：一〇〇一話をつくった人』
新潮社、2007年、230頁。

(18) 「薬局の友」、山之内製薬、1965年10月号。

(19) 最相葉月『星新一：一〇〇一話をつくった人』
新潮社、2007年、230頁。

では、作品の冒頭で展開されるポッコちゃんの描写を検討しよう。ポッコちゃんは、以下のように描出されている。

もっとも、少しつんとしていた。だが、つんとしていることは、美人の条件なのだった。
[中略] 頭はからっぽに近かった。彼もそこまでは、手がまわらない。簡単な受け答えができるだけだし、動作のほうも、酒を飲むことだけだった。[中略] 彼は、それ（ポッコちゃん—引用者）が出来上がると、バーにおいた。そのバーにはテーブルの席もあったけれど、ロボットはカウンターの中におかれた。ぼろを出しては困るからだった。お客は新しい女の子が入ったので、いちおう声をかけた。名前と年齢を聞かれた時だけはちゃんと答えたが、あとはだめだった。それでも、ロボットと気がつくものはいなかった。
(14-15 頁)

この引用部は、星のテキストを特徴付けるシンプルかつ短い文の最たる例であると言えよう。この特徴的な文体は、「ポッコちゃん」において確立されたとされており、星自身も「ポッコちゃん」を「書き終わった時、内心で『これだ』と叫んだ」⁽²⁰⁾という。しかし、文章が簡潔だからといっても、その内容が浅薄であるということではない。この文体には、読者を物語の世界に引き込むリズムがある。そして、物語の展開を注視する読者に対して、後述するように、一つひとつの短文が内包する皮肉によって衝撃を与える。

まず、引用部冒頭の「もっとも、少しつんとしていた。だが、つんとしていることは、美人の条件なのだった」という箇所から検討しよう。最初に「美人」という言葉が女性ジェンダー化されてきたという点に注目しなくてはならない。元来、奈良・平安時代には、「うつくし」という言葉は、「幼い者・弱い者を『かわいい』『いとしい』と思う気持ちを表わした」⁽²¹⁾。その後、鎌倉時代には、「美」の字が用いられる言葉、たとえば「美麗」などは女性のみに対して使用された。そして近・現代では、「美人」という言葉は、「美しい容貌の女性。美女」⁽²²⁾という意味で使われている。それに対して、〈男性〉の美を表現する際には「美男」あるいは「美男子」という言葉が使用され、その初出例は「美人」より遅い⁽²³⁾。すなわち、「美人」という言葉は、現代に至るまで、〈女性〉に対してのみ用いられてきた言葉なのである。

(20) 最相葉月『星新一：一〇〇一話をつくった人』(23) 松村明『大辞林』三省堂、2006年10月27日、新潮社、2007年、233頁。2144頁。

(21) 秋山虔『王朝語辞典』理想社、2000年3月25日、70頁。

(22) 松村明『大辞林』三省堂、2006年10月27日、2124頁。

では、「美人」という言葉が女性ジェンダー化されてきたことを念頭におきながら、「つん」としていることは、美人の条件なのだった」という文を分析しよう。この一文は、「美人」あるいは美しい容貌の女性のあり方を定義し、それをカテゴリー化している。すなわち、美しい女性というカテゴリーが存在し、それに属する人々は「つんとし」た冷たさと結びつけられている。このように、ボッコちゃんが「美人」の条件を満たしそのカテゴリーに十全に包含されるため、以降「冷たく」接される客たちはボッコちゃんに対して違和感を抱くことはないのである。

このように、「ボッコちゃん」の冒頭部分は、女性の見た目だけにとどまらず、その行為にも条件を設けている。したがって、この一文はロボットについてというよりも、〈女性〉のコミュニケーションの在り方について記されていると考えられる。〈女性〉には様々な社会的期待や理想が織り合わされ、そして負わせられている。例えば恋愛において、男性に尽くし、彼を立てることが期待され、「母」という言葉から連想される優しく暖かいイメージも、女性の一つの理想的なあり方だとされている。しかし、ボッコちゃんは独身で子どもがおらず、年齢を尋ねられたときには「まだ若いよ」(15)と答える。作中のみならずわれわれの社会においても若く美しい女性のあり方は確立されており、ボッコちゃんはこのカテゴリーに属していると考えられる。

しかし、妻や母、「美人」のそれぞれのイメージに違いがある一方で、それぞれのコミュニケーションのあり方には共通点がある。すなわち会話を規定する枠組みはジェンダー化されており、話し手と聞き手が存在するとすれば、男性が話し手の位置を占有することで女性は聞き手の役割を担う傾向がある。実際、来談者の相談を聞き受けるカウンセラーの男女比もこの証左になる。カウンセラーの7割が女性で、男性は全体の3割に留まる⁽²⁴⁾。その原因は女性の方が感情に繊細だからであるとされたり、やさしく受け止める事が得意だからであるなど様々な意見があるが、このような特徴は女性の根本的な性質であるというよりも、社会構造や教育が「女性」に負わせているものであると考えられる。とにかく明らかなのは「女性」が他者の相談を聞き受ける役割を男性よりも多く果たしているということである。

このようなジェンダー化された役割がボッコちゃんの客との会話に影響を及ぼしているといえるだろう。前述したように、ELIZAとボッコちゃんは相手のセリフの中心的な言葉を反復し、自らの意見や考えを述べずに、相手を場の中心に位置付けるという点で、社会が女性

(24) Luona Lin, Andrew Nigrinis, Peggy Christidis, Karen Stam, "2005-13: Demographics of the US Psychology Workforce," *American Psychological Association Center for Workforce Studies Survey*, July 2015, Web. Accessed December 10, 2018.

に負わせるコミュニケーションの条件を満たしている。「名前と年齢を聞かれた時だけはちゃんと答えたが、あとはだめだった」ポッコちゃんも例外ではなく、最低限の条件しか満たしないことが彼女の存在のリアリティを増加しているとも考えられる。

このように、「ポッコちゃん」は〈女性〉に対して社会的に期待されているコミュニケーションのあり方を描写しているが、テキストがそれに向けている視線も分析しなければならない。静かな女性が理想として描かれ男性を魅惑するという筋立ては、「ポッコちゃん」にのみならず、他の文学作品にも現られる。しかし、「ポッコちゃん」ほどこの典型に対し議論し、読者の思考を触発する作品は滅多にない。例えば「名前と年齢を聞かれた時だけはちゃんと答えたが、あとはだめだった」という一節の後、「それでも、ロボットと気がつくものはいなかった」とある。この一文における星に特徴的な皮肉を通じて、このような簡単な会話しかできないにもかかわらず、なぜポッコちゃんが人間ではないことに誰も気がつかないのだろうか、と読者に問いかけているように思われる。すなわちこの段落の最後の一文によって、読者は女性のコミュニケーションにおける役割について思考を促されるのである。

〈女性〉の社会的在り方・行為について示唆している箇所は、ポッコちゃんと客の会話を描写している場面にとどまらない。次に引用するのは、ポッコちゃんが男性、とりわけバーのマスターとの関わりを描いた箇所である。

答えられない時には信号が伝わって、マスターがとんでくる。

「お客さん、あんまりからかっちゃ、いけませんよ」

といえば、たいていつじつまがあって、お客はにが笑いて話をやめる。[中略]

だが、お客は気がつかなかった。若いのにしっかりした子だ。べたべたおせじを言わないし、飲んでも乱れない。そんなわけで、ますます人気が出て、立ち寄る者がふえていった。(17頁)

まず、「答えられない時には信号が伝わって、マスターがとんでくる」という箇所に注目しよう。客とポッコちゃんとの会話はとりとめのないものであるにもかかわらず、マスターが頻繁に会話に介入することは、客の眼に奇異に映るはずであろう。しかし、「だが、お客は気がつかなかった」という文から、マスターの行動の奇怪さに気を留める者はいない。むしろ、マスター

の介入を受けることこそがポッコちゃんの「人気が出」た理由になっているのである。なぜなら、複雑な質問に対応せずにいることがその〈女性らしさ〉を増しているといえるからである。娘や部下の〈女の子〉が困難に直面した時に、家父長的な役割を果たしている者が彼女たちを助けるという構図は、われわれの社会においては当然視されてしまっている。同様に、ポッコちゃんが〈女性〉と思われているという事実が、家父長として機能しているマスターの過剰な保護に対する客たちの違和感を減少させているのである。このように、ELIZAがセラピストの応答に自らをなぞらえたことで、自身が機械であることを隠蔽しえたのと同様に、ポッコちゃんの〈女性らしい〉コミュニケーション及び家父長制を背景としたマスターによるポッコちゃんの「保護」によって、「彼女」がロボットであるという事実が秘匿されたまま、物語は完結を迎えることになる。

そして最後に留意したい点は、星の皮肉である。星に関する数少ない先行研究の中で、彼のテキストが人気を博する根拠をその皮肉に求める論がある⁽²⁵⁾。星に固有な皮肉は当然、「ポッコちゃん」にも多く見られる。すでに考察した引用部にも、「それでも、ロボットと気がつくものはいなかった」や「だが、お客は気がつかなかった」という短文は、皮肉に満ちている。「ポッコちゃんがロボットだと当然気がつくはずなのに、誰も気がつかなかった」、「なぜポッコちゃんがロボットであるということがこれほど明白なのに、誰も気がつかないのだろうか」と、作中の一つひとつの文章が問いかけているように思われる。星はとりわけフェミニストとは言えないし、フェミニズムやクィア理論が本格的にアカデミアに重要な地位を占め始める前には既に世を去っている。しかし、われわれの社会に対して、彼特有の皮肉を以て鋭い批評性を発揮する才能があったことに間違いはない。その批評性とは、現代において「ポッコちゃん」を読み返すことで明らかになる、男女の役割の矛盾、それぞれのコミュニケーションの条件の違いを、皮肉を用いて透視するテキストの企図である。ジェンダーという鍵概念が流行する30～40年も前に、エンタテインメントというジャンルに事寄せて、星がこのような問いを読者に投げかけていたことは評価に値するだろう。

2. 女を造るということ

前節では、アラン・チューリングの機械知能論と「ポッコちゃん」とが、機械と〈女性〉それぞれに押し付けられるコミュニケーションの条件のありようを明確化している点を論証し

(25) Robert Matthew, *Japanese Science Fiction: A View of a Changing Society*, Routledge, 1990, p. 94.

た。しかし、対話者の発話を反復するというコミュニケーションの特徴だけでなく、「ボッコちゃん」と1950年に発表されたチューリングの論はコミュニケーションのジェンダー化という点でも共鳴している。この点を説明するために、以下ではまずチューリングの論文「計算する機械と知性」⁽²⁶⁾について考察したい。この論文の冒頭でチューリングは、前節で概説したチューリングテストを以下のように、ジェンダー化された比喻を用いてモデル化している。

[模倣ゲーム] は男性 (A) と女性 (B)、および性別は問わない一人の質問者 (C) の3人によって行われる。まず質問者はほかの2人とは別の部屋に入る。質問者にとってのこのゲームの目的は、この2人のうちどちらが男性でどちらが女性かを言い当てることだ。[中略] [質問者は] 次のような質問をすることが許されている。

C: [A] さんの髪の毛の長さを教えてもらえますか。

[...] このゲームでのAの目的は、Cが間違った判断をするようしむけることである。彼の答は、たとえば次のようなものになる。

「私の髪はみじかくて、長いところでも9インチ [(23cm)] ぐらいです」

[中略] このゲームでのBの目的は、質問者を助けることであり、彼女にとって最善の戦略とはおそらく本当のことを正直に答えることだろう。彼女は「女は私です、彼の言うことを聞いてはいけません！」などをつけ加えることもできるが、これは何の役にも立たない。なぜなら男の方も同じようなことが言えるからだ。

ではここでひとつ問いを立ててみよう。「このゲームで機械がAの役を演じるとしたら何が起ころうか？」こうなると、ちょうど男性と女性によって行われているときと同じくらい、質問者は判断を誤るだろう。この問いは私たちの最初の問い「機械は考えることができるか」を置き換えるものになる。⁽²⁷⁾

このように、チューリングは自身のチューリングテストを説明するために、男女がそれぞれ異

(26) Alan Turing, "On Computing Machines and Intelligence," *Mind* 49, 1950, pp. 433-460.

(27) 「計算する機械と知性」の原文(英語)は、<https://www.csee.umbc.edu/courses/471/papers/turing.pdf>に公開されている。また、田中求之による邦訳は<http://www.unixuser.org/~euske/doc/turing-ja/index.html>にて、Oxford University Pressの許可を得て公開されている。本論で引用している「計算する機械と知性」の

冒頭部は、田中求之による邦訳に依拠したもののだが、意図を明確にするために筆者が多少の改変・省略を行った。

なるジェンダーを模倣できるかどうかというゲームに喩えている。

以上の引用に関してまず指摘したいのは、「機械の知性」あるいは知能が、当初からジェンダーに関係づけられていたということである。チューリングは、「機械は考えることができるのか」という問題を、「人が機械か人間か正しく判断できるのか」という問題に置き換えているが、対話者が機械であることを判別するチューリングテストを性別を弁別する模倣ゲームに喩える点で、この研究はジェンダーについて興味深い問いを投げかけている。つまり、「機械は考えることができるのか」と「人が機械か人間か正しく判断できるのか」を置換できるのであれば、「あなたの性別は何か」という問いを、「あなたは社会的に男性と判断されているのか、それとも女性と判断されているのか」という質問に置き換えることもまた可能である。このようにチューリングは、ジェンダーの判別方法の基礎を、性質から行為へと移行させており、流動的且つパフォーマティブな社会的構築物としてジェンダーを位置づけているのである。

無論、これはチューリングの研究の主たる目的ではなかつただろう。彼はあくまでも、機械と知能の関係性を考察しているからである。しかし、チューリングテストを考案したこの論文の2年後、1952年に、チューリングは同性愛の「罪」で逮捕され、ホルモン療法による化学去勢を強制され、1954年に自殺していることから、彼自身にもジェンダーとセクシュアリティの社会的規制との個人的な葛藤があったことが推測される。そしてチューリングによるジェンダーの社会構築性への無意識的言及は、その後のジェンダー研究との類似点が多く見出せる。1988年、チューリングが「計算する機械と知性」を発表した38年後に、ジュディス・バトラーはジェンダー・パフォーマティビティ論を発表し、ジェンダーは本質的に決定されているのではなく、行為によって築かれる社会的な構築物である⁽²⁸⁾と述べて、ジェンダー論やフェミニズム研究、クィア理論の展開を大きく揺さぶった。すなわち、1950年のチューリング、そして1988年のバトラーの論はそれぞれ、ジェンダーが行為であると主張しているのである。

このような思考的枠組みは、本論の対象である「ボッコちゃん」といかに関連しているのだろうか。この点を明らかにするために、「ボッコちゃん」の冒頭部に注目したい。

そのロボットは、うまくできていた。女のロボットだった。人工的なものだから、いくらでも美人に作れた。あらゆる美人の要素をとり入れたので、完全な美人ができあがった。

(28) ジュディス・バトラー著、竹村和子訳『ジェンダー・トラブル』、青土社、1999年。

もっとも、少しつんとしていた。だが、つんとしていることは、美人の条件なのだった。

[中略]

時間もあるし、それでロボットを作ったのだ。まったくの趣味だった。

趣味だったからこそ、精巧な美人ができたのだ。本物そっくりの肌ざわりで、見わけがつかなかった。むしろ、見たところでは、そのへんの本物以上にちがいない。(14-15頁)

「そのロボットは」という言葉から始まり、これから物語の対象が機械であるという前提を設定している。ここではまず、人間と機械の間にある差異に着意したい。古くから、性別は生殖における役割に根元化されており、子宮や〈女性器〉を有する存在が女性であり、精虫あるいは〈男性器〉を有する存在が男性であると定義されてきた⁽²⁹⁾。つまり、人間は動物と同じように〈生きている〉存在であり、生殖機能を有するという前提に立った規範的観念が共有されてきた。しかし、この観念の枠組みでは、〈生きていない〉機械には、性的機能を有しないが故に、性別も存在しないということになるはずである。だが、テキストには「そのロボットは、うまくできていた」という文に続き、「女のロボットだった」とあり、明らかにこの観念との間に論理的矛盾を来す。

ここで確認しておきたいのは、テキストの言葉と作家の意図との間のズレである。星が「ボッコちゃん」を執筆した際、彼は「女」という言葉が内包している矛盾を明らかにしようと意図してはいなかっただろう。あくまでも、「女のロボットだった」と綴った時は、「女の形をしたロボットだった」という意図で書いたと思われるが、重視したいのは、まさにこの点である。われわれが男女を弁別する際、まず外見上のシグナルを感知すると思われる。胸の大きさや肩と臀部の広さ、顎の形という身体的なシグナルから、スカートあるいはスポンを履いているのか、ピンク色の衣服を身につけているか、それとも落ち着いた青やグリーンの衣服なのかというファッションに至るまで、われわれはジェンダー化されたさまざまな信号を読み取る。無論、これは、ジェンダーが身体に結びついておらずパフォーマティブなものであるというバトラーらが提起した見解に通じる。では、次に赤ちゃんを迎える準備をしている家族を例に取ろう。家族は超音波検査でエコー写真に男性器が発見されるかいないかということにより、購入する乳児服の色を決めたり、玩具に人形を買うのかそれともトラックを買うのかを判断する。このように、人は社会的な性 (gender) を生物学的な性 (sex) と結びつけているの

(29) 大辞林において「男」は、「ヒトの性のうち、女を妊娠させるための器官と生理をもつ方の性」と定義されている。松村明『大辞林』三省堂、2006年10月27日、357頁。

である。

生まれつき「子宮や〈女性器〉を有する存在」の多くが、社会が認める「女」として振る舞うために、二つの性の区別が不明瞭になっている。しかし、ポッコちゃんは、生物学的に「女」ではないにもかかわらず、「女」のロボットであった。「女のロボットなのだった」という一文で、意図せざるにせよ、星は生物学的性とジェンダーとを線引きしている。生物学的に「女」ではないポッコちゃんが「女」と呼ばれることと、青年が生物学的に「女」ではないポッコちゃんと恋に落ちること（この点は次節で詳しく検討する）の2点が、「女」とは何かという問いを提起する。このように、「ポッコちゃん」は社会的性あるいはジェンダー概念を攪乱する作品として読むことが可能である。

この点を明らかにするために、「人工的なものだから、いくらでも美人に作れた」という箇所に注目しよう。前節で述べたように、「美人」という言葉がジェンダー化されている以上、星は、性別との関係がより希薄な言葉を選択できたはずだが、あえて〈女性〉というシグナルを発信する言葉を選んだのだ。更に、「人工的なもの」あるいは機械には、前述したように性別がないはずだが、ポッコちゃんは「人工的なものだから」こそ美しい「女」とであるとされている。これはともすれば単純に「人工的なものだから」「美しい」と読み取れるのだが、「美しい」という言葉が女性を連想させる記号であり、同時に女性の価値を決定する基準でもあるということに注目しなくてはならない。たとえば、容姿と賃金の関係は長年にわたって研究されており、多くの研究において、容姿がよいとされる人がより高い賃金を得ているということが証明され、女性の場合、容姿が賃金の差を決定する割合が極めて高いということが指摘されている⁽³⁰⁾。メディアでも、就職できないことを理由に整形をする女性 que 取り上げられる。このように、美しさは「いい女」の条件となっており、「いい女」という言葉自体がその女性の容貌を重視するニュアンスを持っていることもこの証左になる。すなわち、より美しい存在がより女性らしく、より女性らしい存在がより美しいというように、「女」と「美しさ」には、直接的な相関があるのである。

以上の引用もジェンダーによって不均等に構造化された「美」の価値基準に関する以上の考察を補強している。「そのロボットは、うまくできていた」と始まり、その後続く「女のロボットだった。人工的なものだから、いくらでも美人に作れた。あらゆる美人の要素を取り入れたので、完全な美人ができあがった。」という部分はその補足説明として読めよう。ここで

(30) "Beauty and the Labor Market," *American Economic Review*, Vol 84 (December, 1994), pp. 1174-1194.

はポッコちゃんがロボットとして「うまくできていた」理由が女として美しかったからだという点が浮き彫りにされている。本論はポッコちゃんが「女のロボット」であるということから「女」とは何かという問題に注目しているが、パフォーマティブなジェンダーの構築は女性に限らない。物語の展開は変わってくるが、「人工的なものだから、いくらでもカッコよく作れた」という男性バージョン、「ポツくん」もあり得る。ここで重視したいのは、「女」という「自然」と結びつけられている存在、あるいは生物学的身体に結びつけられている存在と「人工的」という言葉とをこの文脈で並置することによって、テキストは、〈女〉というカテゴリーが果たして自然化されるのか、ジェンダーという概念は自然化されるのか、それとも社会的かつ流動的なものであるのかという問いを読者に再考させようとしているのである。

同様に、「あらゆる美人の要素をとり入れたので、完全な美人ができあがった」という一文は、ポッコちゃんが「美人」に「できあがった」理由が、マスターによるパーツの選択や精巧な組み合わせであることを明らかにしている。この論理の延長線上には、いかなる存在も、〈正しい〉「肌ざわり」などといった「美人の要素を取り入れ」ることができれば〈女〉になることが可能なのだという把握が見いだせるだろう。つまり、〈女性〉というジェンダーは本質的に決定されるのではなく構築されるのであり、「ポッコちゃん」はジェンダーの構築性を明示することで、ジェンダーの本質論的概念化を切り崩しているのである。

しかし、ジェンダーの社会構築性に対して同時に着目されねばならない言葉は、引用文中の「本物」という二文字である。「本物」という言葉が物語に登場するだけで、その物語が立脚するジェンダー観を古くかた苦しいものだと感じる読者もいるかと思われるが、まずはこの言葉の文脈を考える必要がある。「あらゆる美人の要素をとり入れた」「人工的な」ポッコちゃんは「本物そっくり」で「見わけがつかない」。このようにテキストは「作られた」〈女〉と「本物」の〈女〉とを対等な関係に置いている。また、「人工的な」ポッコちゃんが「そのへんの本物以上」に「うまくできた」からこそ、むしろポッコちゃんの立ち位置が「本物」以上なのである。ポッコちゃん、すなわち「作られた」〈女〉は、〈自然〉な〈女〉には不可能である〈女性らしい〉条件を満たしているということになる。

このように、チューリングと星は、バトラーがジェンダー・パフォーマティビティ論を発表する30年も前に、機械知能論と創作というそれぞれの領域において、われわれのジェンダー観を問い直していたのである。次節では、星特有のジェンダーに関する皮肉と「ポッコちゃん」

の結末が作中でどのように機能し、いかなる意味を持っているのかについて考察する。

3. 結末における暴力とその意味

ここまで、星新一の「ボッコちゃん」が、コミュニケーションの構築性やジェンダー化の面で、われわれの社会におけるジェンダー構成を明らかにしていると論じてきた。第1節では、ボッコちゃんの客との会話とマスターとの関わりとが、〈女性〉らしいコミュニケーションの条件を示唆していることを指摘し、第2節では、マスターがボッコちゃんを造ることが、ジェンダーの社会的構築性・パフォーマンス性を表明している点を明らかにした。しかし、「ボッコちゃん」はわれわれの社会が〈女性〉というカテゴリーをいかに作り上げているのかを明らかにすると同時に、その社会的構造が社会と人間に及ぼしている影響について批判しているとも考えられるのではないだろうか。この点を詳らかにするために、以下ではまず作品の結末を考察したい。バーの客であった「青年」が、ボッコちゃんに好意を抱くも父親にボッコちゃんとの恋愛が禁じられてしまう。その後、青年はボッコちゃんにも「冷たく」接されたことで、「彼女」を毒で殺害することに決めた。以下の引用は、青年がボッコちゃんを毒殺しようとする場面と、その後、マスターが毒薬の混ざった酒をボッコちゃんの「足の方のプラスチック管から」「回収し、お客に飲ませ」る（17頁）場面である。

「もう来れないんだ」

「もう来れないの」

「悲しいかい」

「悲しいわ」

「本当はそうじゃないんだろう」

「本当はそうじゃないの」

「きみぐらい冷たい人はいないね」

「あたしぐらい冷たい人はいないの」

「殺してやろうか」

「殺してちょうだい」

彼はポケットから薬の包みを出して、グラスに入れ、ボッコちゃんの前に押しやった。

「飲むかい」

「飲むわ」

彼の見つめる前で、ポッコちゃんは飲んだ。

彼は「勝手に死んだらいいさ」と言い、「勝手に死ぬわ」の声を背に、マスターに金を渡して、そとに出た。夜はふけていた。

マスターは青年がドアから出ると、残ったお客に声をかけた。

「これから、わたしがおりますから、みなさん大いに飲んで下さい」[中略]

その夜、バーはおそくまで灯がついていた。ラジオは音楽を流しつづけていた。しかし、だれひとり帰りもしないのに、人声だけは絶えていた。

そのうち、ラジオも「おやすみなさい」と言って、音を出すのをやめた。ポッコちゃんは「おやすみなさい」とつぶやいて、つぎはだれが話しかけてくるかしらと、つんとした顔で待っていた。(18-19頁)

「冷たい」という言葉が改めて登場している点に注目しよう。物語において、「冷たい」や「つんつんしている」ことが〈女性らしい〉要素として位置付けられていることは第1節で指摘したが、上の引用では、この「冷たさ」は、青年の暴力の引き金の一つとして機能している。最初に青年を魅力したポッコちゃんの「冷たさ」は、彼の思慕が強くなる過程で、その「冷たさ」が望ましいものではなくなっていく。このように、「ポッコちゃん」における〈女性〉という構築物はあるジレンマを内包しているのである。すなわち、「美人」になるためには、他人に「冷たく」しなければならないにもかかわらず、その同じ「冷たさ」は毒殺という被害を受けることにつながる。「ポッコちゃん」におけるこのようなジレンマは、われわれの社会において、とりわけ〈女性〉が経験する二重基準（double standard）の反映として読めるだろう。元来、フェミニズム理論では、二重基準という術語は家庭外で仕事をする女性がそれと同時に家庭内の労働も背負わなければならない状況を意味する。しかし近年、この用語は、男女の仕事の分担のみならず、社会が〈女性〉に要求する様々な女性像を指し示ようになってきた。例えば、現代社会において、〈女性〉には性的な魅力とあどけなさとの両方が要求されることを指摘する研究者は多い⁽³¹⁾。このようなジェンダーに関わる二重基準には、人間の女性ではないポッコちゃんも衝突せざるをえない。

(31) Jane Pilcher and Imelda Whelehan, *Fifty Key Concepts in Gender Studies*, 2017, pp. 38-40.

また、女性に危害をもたらすこの二重基準が男性中心的な仕組みであるということに注目しなくてはならない。「美人」という基準は、容姿によって〈男性〉の愛情を集められるかどうかということに起因している。同様に、青年がポッコちゃんに「冷たさ」とは別な感情を差し向けるよう期待したように、〈男性〉は〈女性〉に「暖かさ」を求める。「ポッコちゃん」においても、ポッコちゃんはマスターが抱く「美人」の理想像に沿って造形され、青年はその美しさと冷たさに惹かれるが後に彼女が自分に暖かく接してくれるよう期待し始める。このように、「ポッコちゃん」は、〈女性〉の身体や行為を規制する男性中心の社会を表象していると考えられる。

しかし、男性中心的にジェンダー化された二重基準は青年の暴力の引き金とはなっているものの、その根本的原因ではない。この原因を明らかにするために、〈男性〉と暴力の関連を追及した先行研究を参照したい。現在、特に欧米のメディアでは、銃乱射事件が話題となり、その原因と、加害者が必ず男性である理由についての研究が活発に行われている。なかでも1980年にレイウェイ・コルネルが提示した「覇権的男性性」という概念は銃乱射事件の背景にある男性と暴力との関係を考察する上で極めて重要な鍵概念となっている。「覇権的男性性」とは、「他の形態の男性性よりも文化的に賛美される男性性の形態のひとつ」であり、「家父長性の正当性に対して今日的に受け入れられる応答を具現化したジェンダー実践の編成として定義されうる。それは、男性の優位な立場と女性の従属性を保証すると考えられる」⁽³²⁾。男性性の研究者であるトリスタン・ブリジズとタラ・トブラーによれば、この「文化的に賛美される男性性」が男性のアイデンティティにおいて重要な位置を占める場合が多く、この男性性が不安定に陥る時に、反応が過剰化し暴力へと及ぶことがあると論じている⁽³³⁾。このような現象は、確かに上に引用した「ポッコちゃん」の結末に見出せるだろう。より権威のある「父」による恋愛を禁止する命令とポッコちゃんによる拒絶によって、青年の男性性において保証されるべき「優位な立場」が脅威に晒されている状況こそ、彼の暴力の発動を促した原因なのである。このように、〈男性〉が暴力を起こす原因は、男性のアイデンティティが社会的に構築される過程にある。すなわち、社会的な男性性には、他者による拒絶や自身の弱さを有効に処理する機能が備わっていないのであり、それによって、暴力が発生するのである。このように、「ポッコちゃん」は、〈女性性〉のみならず、社会的に構築される〈男性性〉とそ

(32) R. Connell, *Masculinities*, University of California Press, 2005, p. 77. 邦訳は尾崎俊也「男性性を理解する分析概念の探求：ヘゲモニックな男性性とサラリーマン研究を事例に」、『未来共生学』2018年3月11日、228頁に依拠した。

(33) Tristan Bridges and Tara Leigh Tober, "Mass Shootings and Masculinity," *Focus on Social Problems: A Contemporary Reader*, Oxford University Press, 2016, pp. 507-512.

れが挫折したときに他者に向けられた場合に伴う有害性をも描写しているのである。

しかし、この作品の真の批評性は、青年の〈男性的〉な暴力が広がっていく過程にこそある。上の引用にあるように、青年はポッコちゃんにおそらく毒であろう「薬」を飲ませ、マスターが意図せずにその薬が混ざった酒を客に飲ませ、マスターも含めてバーにいる人々は全員、死んでしまう。要するに、直接的な被害者であるポッコちゃんから、マスターや、青年と関係がない他の客にまで、青年の〈男性的〉な暴力が広がり、拡大していく。「ポッコちゃん」におけるこの暴力の在り方は、「覇権的男性性」に起因する〈男性〉の暴力が、バーというアレゴリーを介して、暴力の主体と客体とに留まらず、彼らの関係性の外部にまで広がっていくことの表われであると考えられる。ここで銃乱射事件における男性性と暴力性という論点に戻ろう。事件を起こした男性のうちの多くが、以前女性に恋愛を拒絶された経験を犯行の理由として挙げ、事件前に女性蔑視的な書き込みをインターネットに投稿していた⁽³⁴⁾。しかし、犯人の恋愛を拒絶した女性は事件の犠牲者である場合とそうでない場合とがある。このように、「ポッコちゃん」においてポッコちゃんと彼女に思いを寄せていた男性以外の非当事者たちに広がっていく彼の暴力は、銃乱射事件における男性の暴力の拡大という現実と呼応している。

また、女性からの拒絶以外にも、失業や、就職の困難を犯行理由として挙げるものも多い⁽³⁵⁾。このような銃乱射事件に見られる2つのパターンは、犯人が仕事や恋人という彼がそこから何かを享受する資格があると思込んでいるという共通点が見られる。会社での勤務成績が振るわずとも、また恋愛における彼の態度が粗悪であっても、仕事や恋人をなくした時には不公平な扱いをされたと感じるということである。このような思込込みは、男性や人種の多数派など、社会的に高い位置を占めるグループに多いとされている⁽³⁶⁾。「ポッコちゃん」における青年も、このようなグループに該当すると考えられる。自由に使える金があるからこそポッコちゃんが勤務するバーに通え、金が尽きたときには「とうとう家のお金を持ち出そうとして、

(34) 例えば、2014年5月23日にカリフォルニア州立大学サンタバーバラ校にて、6人を銃殺し、14人に重傷を負わせたエリオット・ロジャークが、事件前にユーチューブに投稿したビデオで、女が自分を愛してくれないことが犯行動機であると説明している。Megan Garvey, "Transcript of the disturbing video 'Elliot Roger's Retribution,'" *LA Times*, Los Angeles, May 24, 2014, Web. Accessed December 10, 2018.

(35) A. R. Pah, J. Hagan, A. L. Jennings, A. Jain, K. Albrecht, A. J. Hockenberry, L. A. N. Amaral, "Economic insecurity and the rise in

gun violence as US schools," *Nature Human Behavior*, January 2017.

(36) Christopher Vito, Amanda Admire, Elizabeth Huges, "Masculinity, aggrieved entitlement, and violence: considering the Isla Vista mass shooting," *International Journal for Masculinity Studies*, Volume 13 (Issue 2), 2018, pp. 86-102.

父親にこっぴどく怒られてしまった。」(17) このように青年は、男性という高い社会的位置を占めている上、家にもお金があるという少なからず依存的な男性を想起させる。

では、青年の及ぼす暴力の原因とその社会的な背景について考察したうえで、彼がバーを去り、自分が起こした犯行の責任を取らずに被害にも合わないということについてはどのように考えられるだろうか。本論文では、青年がポッコちゃんに毒を飲ませた原因をその本人や社会が男女に負わせる男性性・女性性に求めてきたが、実際の社会において、犯行の責任を被害者に負わせようとする事態は多く見られる。たとえば銃乱射事件では、事件後に犯人と同様の不公平な扱いをされていると思い込む男性によって、犯人が英雄として美化されることがある⁽³⁷⁾。このような事態は、女性が男性の性的要求に応えないために、男性が仕方なく彼女たちに対して罰を与えるという思考の枠組みに規定されている。これと同様の現象が性的暴行を起こした男性の自己正当化にも見られる。被害者の服装や飲酒状態が議論され、被害者が暴行された原因をその本人に押し付けようとする事例が少なくないなか、犯行を起こしている犯人が無罪とされたり微々たる刑罰で済まされてしまう場合がある⁽³⁸⁾。ジェンダーに基づく男性の暴力とそれに対する責任遂行の欠如という現実の不当性は、ポッコちゃんを毒殺しようとした結果、バーの客を全員殺してしまったにもかかわらず、その責任を果たさない青年と強く響き合う。

ここまで作品の結末が我々の男性中心社会と呼応していることについて述べてきたが、最後に注目したいのが、マスターとバーの客が死んだ後に残るのはポッコちゃんのみであるという点である。前節で述べたように、ポッコちゃんは、適切なパーツが精巧に組み合わせられることで「女」となった。しかし、自発的にジェンダーを演じるのではなく、ポッコちゃんは男性であるマスターの「女」のイメージに沿って作り上げられた存在である。同様に、その理想的な「女」を手に入れられなかった青年は、「彼女」を殺す権利が自分にあると判断した。これは、〈女性〉というカテゴリーが依然として男性中心的な社会のなかで構築され、その存在の根拠を男性が決定する権能を持つという性規範を反映していると考えられる。しかし、マ

(37) 注(34)で概観されている2014年のカリフォルニア州での銃乱射事件後、犯人のエリオット・ロジャールのファンサイトが立ち上げられ、右翼的なニュース番組やラジオ番組でかわいそうな男の子として取り上げられた。

(38) 近年注目されている事件を日米一つずつあげると、2015年カリフォルニア州のスタンフォード大学で意識不明の女性に対して性的暴行を行ったとして有罪と判決されたブロック・ターナーが、性的暴行罪には最大14年の収監期間が設け

られているにもかかわらず、6ヶ月の収監に処され、実際には3ヶ月の服役に留まったということがある。日本では、フリージャーナリストの伊藤詩織を準強姦した容疑で警察の捜査対象となっていた山口敬之が嫌疑不十分で不起訴処分となったということがある。

スターによって造られ、青年によって殺害されそうになるポッコちゃんは残存する。すなわち、物語の結末においてジェンダーに関する権威構成には転覆が見られるのである。この展開は物語上での最も刺激的な皮肉を持つ箇所であり、読者の印象に最も深く刻まれるところだろう。ポッコちゃんを造ったマスターが、自身の創作物によって無意識的に自らの死を招来した事実には誰もが気づくだろう。しかし、ポッコちゃんが意志を持たないロボットであるにもかかわらず、この悲劇的な結末は、男性主義的な社会によって造られたポッコちゃんの復讐ではないだろうかと、読者は疑問に思わざるをえない。

4. 終わりに

本論では、星新一の「ポッコちゃん」が社会的に構築された〈女性〉と〈男性〉の在り方とその構築のプロセスで出来する暴力性や被害の様態を描出している点とを論じてきた。第1節では、アラン・チューリングが提示した機械のコミュニケーション方法と〈女性〉のコミュニケーションとの関係について考察し、第2節では、マスターがポッコちゃんを造るということが、ジェンダーの構築性・パフォーマンス性を表象していると指摘した。第3節では、ジェンダーに関わる二重基準と「覇権的男性性」という概念を用いて、ジェンダーの二分法が人間の社会全体に被害を及ぼしていることを描写することで、「ポッコちゃん」がわれわれの社会についても警鐘を鳴らしている点を明らかにした。しかし、ここで改めて強調したいのは、チューリングの機械知能論から、覇権的男性性という概念に至るまで、本論に用いられた学術的な思考や概念が、「ポッコちゃん」が執筆された1958年には、未だ発表されていなかったということである。すなわち、研究の領域でジェンダーとの関連で対象を考察するということが未だに一般的ではなかった時代において、星の想像力が社会とジェンダーの関係性を先取りするかたちで捕捉し、それに読者の注目を導いていたのである。

日本のSF、とりわけ星の作品は、ロバート・マッシュューが指摘するように、個人の苦労や運命というよりも、人間の社会全体にしか眼差しを向けていない⁽³⁹⁾。マッシュューの指摘は「ポッコちゃん」を考えるうえでも有効であり、「ポッコちゃん」はマスターや青年、ポッコちゃん自身の物語というよりもむしろ、彼ら登場人物を作り上げることで可能になる社会についての物語である。このように、SFは社会の現在と未来とを理解するのに有効な導き糸となる。つまり、SFには当初から社会批判が根強く織り込まれているのである。したがって、今までSF

(39) Robert Matthew, *Japanese Science Fiction: A View of a Changing Society*, Routledge, 1990, p. 160.

をエンターテインメントと蔑視的に分類し等閑に付す枠組みは、端的に誤謬であるばかりでなく、われわれの社会への理解を妨げてしまうものと思われる。

本論が星新一の「ボッコちゃん」をジェンダーの視点から分析したように、過去に遡ってSFが現代の社会について何を予示していたのか、そして現代のSFがわれわれの未来について何を予測しているのかを考えるべきであろう。理解は変化への第一の手段であるが故に、SFは変更や改革への道を暗示してくれることだろう。